

【崑崙】 こんろん

崑崙は黄河の水源地で西域にあるといわれる仙境で、その頂を崑崙山とといいます。

『海山経』『淮南子』『水経注』などに実在する山のように位置が記されているため、かつては実在する山として特定しようとした探検家・研究者もいました。

しかし該当する山は見当たらず伝説上の仙境地と考えた方がよさそうです。もちろんチベット高原とタリム盆地の間の山脈を崑崙山脈と称しますが、これは黄河の水源地といわれる伝説の地名に基づくもので特定の山の名称ではありません。

また、この地を崑崙国、住む人を崑崙人と記す漢籍がありますが、これも漢民族から見た西域の異民族の総称で、特定の民族をいうわけではなさそうです。

伝説上の崑崙山は中国古代神話において極めて重要な山です。玉が産出し、西王母(女仙人)が住み、山の東北より河水(黄河)が発し、その高さは天に通ずるなど様々な伝説が漢籍に見られます。

『十洲記』(『水経注』所引)によれば山頂は三つに分かれ、山頂が広大で麓は狭いそうです。このような奇怪な形の崑崙山は例えば「沂南画像石墓」(後漢後期)に作例があります。

<http://www.rekihaku.ac.jp/kooahoo/journal/nol19/rekishi.html>

の図9の下部の三本のくびれた筒のような形の山がそれです。真ん中に居るのが西王母で左右は仙草を搗く従者(兔?)です。

崑崙山は古代中国を代表する神仙世界でありますから、仏教の浄土思想が伝わる以前は多くの人々が魂の安堵するところとして崑崙山昇仙を願っていたのです。

漢の時代より徐々に伝来してきた仏教は当初伝統的な神仙思想や道家思想を基に中国的な解釈がなされました。

私の拙い持論であります、日本の仏画に神仙思想に基づいて描かれたと思われる浄土図があります。

法隆寺の玉虫厨子宮殿部背面に描かれた山岳は翼を広げた鷲の形の〈靈鷲山図〉です(画像が見当たらず申し訳ない)。靈鷲山は釈迦が『法華経』を説いた聖地として知られています。

この山岳図は「沂南画像石墓」と四・五百年もの時代の違いにより様式こそ異なりますが、山頂が広い三山形式で、麓は細く伝統的な崑崙山の特徴を留めています。

仏教図像である靈鷲山を中国の伝統的な崑崙山の図像を踏まえて描いた作例と思われます。

また『山海経』には崑崙山は「虚すなわち空洞と書かれています。玉虫厨子〈靈鷲山図〉の中腹が洞窟であることも伝統的な崑崙山の図像に基づいているからでしょう。

伎楽面の〈崑崙〉は正倉院に四面、法隆寺献納宝物(東京国立博物館蔵)に一面現存しています。崑崙の面は漢民族が夷国人を想像した姿と思われ、歯牙、獸耳という鬼形で目鼻口も極めて大きく、眉、頬などの彫りも深く肉付けも誇張され造形的に面白いものです。

伎楽とは西域の雑劇で、『日本書紀』によれば推古天皇二十年(612)百済の味摩之が呉国の伎楽舞を伝えたのに始まります。中世後半に滅んでしまいましたが伎楽面や譜が現存しており、現在復元が試みられているようです。

このほか奈良の薬師寺の金堂本尊薬師如来像の台座に表わされたちぢれた頭髪の人たちも崑崙人ではないかという説があります。

・それ江の島は崑崙のきを写し 城の垣重なほけれども 蓬萊の勢ひを伝へたる 三壺の形あらたなり。

謡曲『江島』より

江ノ島を崑崙に見立てて賛美していますね。ここに登場する三壺とは西方の崑崙山に対峙する東方の蓬萊、方丈、瀛州(えいしゅう)の三神山のことです。

三壺と数えるのは「三神山が壺の形に似ているため」とよく解説されていますが、注意すべきは外形が似ているだけではなく、先に述べた崑崙山の様に仙山の中腹は空洞であり構造の上でも壺や瓢に似ているのです。

「壺中天」という言葉があるように壺の中に仙界があるという伝説は崑崙山の姿と無縁ではなさそうです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~